二〇二三（令和五）年度　長野大学

小論文　総合型選抜

次の文章を読み、設問一および設問二に答えなさい。

成人式には二つの起源があった。ひとつは、前近代社会から続いてきた通過儀礼としての成人儀礼である。もうひとつは、戦後の「成人の日」の制定に伴って行われた地方自治体が主催する形の現在の成人式である。伝統的な成人儀礼がもつ意味は、それぞれが属する地域社会や共同体の一構成員としてそこに参加するための自覚を促すことであった。子どもから大人への「生まれ変わり」を容貌の変化や試練の克服によって可視的体験的に表現していた。その際、子どもとして属していた共同体と大人としての務めを果たす共同体はほとんど同一である。武家社会の元服を例にとれば、子どもは藩のなかの「家」の一員として育ち、成人すると家と藩の発展のために尽くすことになる。若者組への加入が事実上の成人儀礼であった前近代の農村社会にあっても、育ってきた村落と今後生活していく村落とは基本的には同じである。ただし、女性の場合は嫁入りという別の通過儀礼によって、新しい家や共同体の一員となっていった。

これに対して、戦後日本社会においては、子ども時代に育ってきた社会と、成人してから働きが期待される社会とは異なっていることが多い。その境目に成人式があり、新成人にしてみると子ども時代という「入口」と、成人後活躍する社会である「出口」がしばしば異なっている。「入口」すなわち、子ども時代に過ごした共通の共同体は「（公立）中学校」である。成人式が「荒れた」とき、その改善策として出身中学校ごとに席を座らせたり、中学校時代の教師が祝福したりすることがあったのはそのためである。新成人が子ども時代に属していた共通の共同体である中学時代を強く認識させることで成人式の意味を再確認させて、それにより「荒れ」を防ごうとしたのである。従って、私立中学校の出身者や市区町村への転入者は、地元中学にルーツをもたないため、成人式への出席率は低い。

現代の成人式の課題は、「出口」すなわち成人後どのような社会に所属するかが不明確なところにある。主催者である行政市区町村が今後も所属すべき共同体であろうか。そう感じるのは一部の地元志向の若者であろう。地元で自営業を営んだり、公務員や地元企業を志望する若者である。その先は都道府県、日本、さらにグローバル社会である。現代の成人式の当初の意義は、成人の日の制定経過からもわかるように、戦後日本の復興を行うに当たって若者の力に期待したことにある。そこでは「出口」として新生日本が想定されていた。一九六六（昭和四一）年に青少年育成国民会議が、文部大臣に成人の日の改善について要望書を出したり、前年の成人式が皇太子列席のもと、東京都と総理府の共催で行われたのも、こうした文脈の中にある。また、一九六〇年代には企業が独自に社員の新成人に対して成人式を行っているが、これは終身雇用を前提として新成人が属すべき共同体が各企業であることを明確にしてきた。

成人式の「出口」が新生日本であったり、各企業であることを支えてきたのは、戦後復興において「西洋に追いつけ、追い越せ」という共通の社会目標があったからである。従って、日本のＧＤＰが世界第二位となり、戦後復興という日本社会共通の目標を達成した一九八〇年代には成人式の「出口」が不明瞭になる。成人式の当初の目的は浮遊し、晴れ着を着て祝福を受けるという形式だけが残った。その先に二〇〇〇年代の「荒れる」成人式が訪れることになる。

（田中治彦『成人式とは何か』）

二〇二三（令和五）年度　長野大学　総合型選抜

小　論　文　解答用紙

受　験　番　号	
FF—	
TT—	
JJ—	
	氏　名

設問一　要旨を二〇〇字（二〇字×一〇行）以内で書きなさい。

10　5

（設問二は裏面にあります。）

設問二　設問文の内容に関して、あなたはどう考えましたか。あなたの考えを四〇〇字以内で述べなさい。